

かがやけ ときわっ子

第10号

TEL 058-232-8695

<http://www.chubufukushikai.jp/tokiwahoikuen/>

スキンシップの重要性 ~学童期・思春期・青年期編~

前号で、乳幼児期のスキンシップの重要性について学びました。今回は将来に備えて（かなり先になるかもしれません）、またきょうだい関係で現在小・中学生等のお兄ちゃん、お姉ちゃんのために「学童期・思春期・青年期」における「スキンシップの重要性」について、岩立 京子 先生から学んでいきたいと思います。

思春期のスキンシップをどう考える？

ずいぶん前ですが、私の同僚とその娘さんの話を聞いて驚いたことがあります。そのお宅では、父親（同僚）がソファで座っていると、高校生の娘さんが「パパ」と甘え、膝の上に座ってくることがあるそうです。私の2人の子どもは高校生の時に、そのような身体接触を伴って甘えてくることは一度もありませんでした。皆さん自身、あるいは皆さんのお子さんは、中高生の頃、親に対してどのような触れ合いを求めていましたでしょうか。

私はその話を聞いて、娘さんが親に対して、すごく素直に感情表現できるのだと感じましたが、一方で、高校生になつても、親に直接スキンシップを求めてくる子どもは、そう多くはないのだろうと思つたりしました。子どもは一人ひとり違うので、個人差があるのは当たり前ですが、多くの子どもをみると、発達するにつれ、直接的なスキンシップから、間接的で多様な触れ合いの表現に変わつてくると考えられています。

思春期の子どもが求めるふれあいとは

乳幼児期の子どもは、スキンシップによる快感や安心感を求めて、膝の上に座る、手をつなぐ、抱っこやおんぶなどを直接、求めます。親にとつても小さい幼児を抱いたり、頬を寄せたりするのは当たり前のことであり、自然にスキンシップを行っています。

子どもが心身ともに成長し、自立心が芽生え始めると、子どもからスキンシップを求めてくることが少なくなつてきます。子どもは自立の過程で親とは違う意見をもち、反抗したり、秘密をもつたりしながら親とは違う自己を形成し、物理的距離感を取りたがります。しかしだからと言って、思春期になるとスキンシップへの欲求がなくなるわけではありません。この欲求は人間の心理の根底に存在し続けると考えてよいでしょう。

ただ、思春期におけるその欲求の表現は、間接的で多様なものになります。例えば、「親が何時に帰宅するかを何度も尋ねる」「学校行事に来るか確かめる」「話をしたがる」、時には「親に文句を言う」などです。

表面的には、自分はもう子どもじゃないと一人前のようにふるまいながら、内面では「親の存在を感じていたい」「話を聞いてほしい」「自分の気持ちをわかってほしい」「干渉はしてほしくないが見守ってほしい」など、心と心の触れ合いを求めているのが思春期です。



親は思春期の子どもとどう触れ合うか

親は、子どもが思春期になると、勉強以外は無関心になりがちです。しかし、思春期は、内面的には自立と依存のはざまで葛藤したり、交友関係や恋愛関係で悩んだり、成績で悩んだりと疾風怒濤の時期と言えます。

子育ては、子どもの心身の発達やその時々の欲求を理解し、尊重し、応じていくのが基本です。子どもを見守り、各人の触れ合いへの欲求を理解し応じていけば、子どもは自立に向けて、確かな歩みを続けていくのではないでしょうか。

「子育ての要諦」は「子どもの確かな自立」に向けて手助けをする、支援することだと考えます。自立を目指すことは、「自分のことは自分でできる」ことだけでなく、「自分で考え判断し行動できる」ことです。それは本園の保育目標にもつながっています。まさに、「自分のことは自分でできる子」「（関心をもち）考え方表現できる子」はそのことに向けてとても大切なものだと考えます。

その自立に向けて、子ども達をしっかり支えていくのは、幼児期の直接的スキンシップであり、発達に応じた間接的で多様な触れ合いだと考えます。それぞれの時期に応じた「適切なスキンシップ、触れ合い」を考えていっていただければと考えます。そうすることによって、望ましい親子関係が継続されるとともに、子どもたちは自らの力で自立に向けて、一歩一歩着実な歩みを進めていってくれることでしょう。